龍鈕を持つ鏡

—大田南2号墳出土鏡を中心に—

鵜島三壽

1　はじめに

1990年春、京都府竹野郡弥栄町の大田南2号墳から、1面の画文帯環状乳神獣鏡が発見された。この鏡の出土した大田南2号墳は、土器などから4世紀代まで遡るものと考えられ、丹後地方の古墳時代を考える上においても重要な古墳である[1]。環状乳神獣鏡は、丹後地方では初めての発見であることから、鏡式面からも、また鏡それ自体からも興味深い点が多い。このように、大田南2号墳を巡る問題は多岐にわたるが、本稿は、この鏡の鈕に注目し、同様な鈕の類例を探し、それらとの比較検討から、大田南2号墳出土の環状乳神獣鏡のもつ性格の一端を明らかにすることを目的としたい。

2　龍鈕を持つ鏡

日本全国から鏡は1000面以上出土しているが、大田南2号墳出土の環状乳神獣鏡(以下大田南鏡と呼ぶ)のように、鈕に文様を持つものは極めて珍しい。大田南鏡は、真上から見ると渦を巻いているように見えるが、これは2匹の龍が旋回している様子を表現したものである。大田南鏡と同じようなモチーフをもつ鏡として、これまで「獣鈕」と報告されてきた鏡の大半が実は同じ龍模様である。そのため、名称に関してはこれまでのように獣鈕と呼ぶよりも龍であることは明らかであるから「龍鈕」と呼んだ方が適切であろう。

双龍旋回式の鈕をもつ鏡には、第1表のような例がある。

筆者の調べた限りでは、以上の14例である。鏡式から見るとは、夔鳳鏡4、獣首鏡7、環状乳神獣鏡2、方銘四獣鏡1である。蔵品番号は、2がTJ1021、6がTJ1020、12は五島美術館69、13は五島美術館301である。

これら14面の鏡は、鈕に関する限り、極めてよく似ている。龍は旋回しながら鈕端に面部が来るように配され、角を持ち、鈕の中心部で尻尾が交わる。いずれも精緻な半肉彫り技法で表現され、右廻り左廻りといった旋回方向や龍図像の細部表現などの違いはあるものの、その基本的な構図は同様である。図版1、2は、筆者が実際に実見し撮影し得た資料である。その他は図版による確認にとどまるが、基本的な相違はないため、全て同様な

第1表　龍鈕を持つ鏡一覧

鏡　式	出土地及び所蔵	直径(cm)	銘　　文	出　典
1 夔鳳鏡	河南省東部	13.7	「長宜子孫」	巌窟217
2 夔鳳鏡	(伝)平壌市大同江 東京国立博物館	15.0	「君宜高官」「土至三公」「大吉」「富貴」	樋口古鏡 図版64-127
3 夔鳳鏡	安徽省霍邱張家崗 龍台孜	—	「位至三公」	文物1958-1
4 夔鳳鏡		—	「君宜高官」「位至三公」	小校巻十五
5 獸首鏡	フォッグ美術館	15.8	「永壽二年正月丙午,廣漢造作尚方明竟,□□□富且昌，宜侯王師命長」	紀年鏡漢10 図版8の1
6 獸首鏡	(伝)楽浪古墳 東京国立博物館	15.1	「延熹七年正月壬午、吾造作尚方明竟、幽湅三岡、買人大富、師命長」	紀年鏡漢13 図版10
7 獸首鏡	湖北省田魯湾 排灌駅	13.3	「熹平二年正月丙午日、吾作明竟、長楽未央君宜高官、吉師命長、□□古市、□□□□、富貴延年」	鄂城34
8 獸首鏡	フリア美術館	18.2	「熹平三年正月丙午、吾造作尚方明竟、廣漢西蜀合湅白黄、周刻無極世得光明、買人大富長子孫、延年益受長楽未央兮」	紀年鏡漢21 図版14
9 獸首鏡	安徽省寿県茶庵 馬家古堆3号墓	14.9	「尚方作竟亦有己、□□□□□古市、明哉日月世少有(不明)人子、君宜高官□□□」	考古1966-3
10獸首鏡	ボストン美術館	—	「長宜子孫」	精華78
11獸首鏡			「呉氏作竟自有紀、徐去非羊宣古市、為吏遷車生耳、壽而東王父西王母、五男四女冢子大吉利」	支那2
12環状乳 神獣鏡	湖北省鄂城	12.3	「正月丙日王囿明竟自有方、除去不漾宜古市、大吉木、幽湅三商、天王日月、上有東王父西王母、主如山石、宜西北萬里、富昌長楽」	鄂城46
13環状乳 神獣鏡	五島美術館	12.5	「吾作明鏡自有方長楽未央□」	支那16
14方銘四 獸鏡	五島美術館	11.7	「吾作明鏡、幽湅三商、天王日月、位至三公」	樋口古鏡 図版110-219

ものと考えてよいだろう。

それでは、これほど酷似する龍鈕を持つ鏡は、どのような関係にあるのだろうか。まず、同一工房による製作かどうかを検討する必要がある。この問題を考える上で重要なことは、鏡の年代の問題である。鏡の年代がほぼ同時期であり、鏡式は異なっても、銘文から補完関係などが成立すれば、同一工房で製作された可能性は高いといえる。

初めに、龍鈕を持つ鏡の製作年代を見ておこう。先の14面の鏡の中で、製作年代を記すものに獣首鏡がある。獣首鏡には紀年鏡が多いが、それを年代順に並べると第2表のようになる。

第2表　龍鈕を持つ紀年銘獣首鏡

紀　年	西暦	出土地及び所蔵	出　典
永壽2年	156	フォッグ美術館	紀年鏡漢10
延熹7年	164	(伝)楽浪古墳	紀年鏡漢13
熹平2年	173	湖北省田魯湾排灌駅	鄂城34
熹平3年	174	フリア美術館	紀年鏡漢21

これによって、龍鈕を持つ獣首鏡は2世紀後半の第3四半期、156年から174年の18年間という極めて短い期間に造られたものであることがわかる。

紀年から、龍鈕を持つ獣首鏡の製作時期が判明したが、刻まれた銘文から製作地も比定できる例がある。「広漢」または「広漢西蜀」と地名を記し、今の四川省で作ったことがわかるものがそれである。

銘文の「広漢」「広漢西蜀」に注目し、製作地を調べていくには、先の14面の鏡以外に他の紀年鏡も含めて考えるのが便利である。環状乳神獣鏡や夔鳳鏡の例も加えてまとめて

第3表　銘文一覧

銘　文	西暦	鈕	出　典
1「元興元年五月丙午日天大赦，廣漢造作尚方明竟，幽湅三商周得無極，世得光明長楽未英，富且昌宜侯王，師命長生如石，位至三公，壽如東王父西王母，仙人子立至公侯」	105		紀年鏡漢6 図版5
2「永加元年五月丙午，造作廣漢西蜀尚方明竟，和合三陽幽練白黄，明如日月照見四方，師□延年長楽未央，買此鏡者家富昌，五男四女為侯王，后買此竟居大市，家□掌佳名□里有八弟□戊子」	145		紀年鏡漢8 図版6
3「永壽二年正月(不明)造□作尚方明□竟鏡保眞宜長王位至□」	156		紀年鏡漢9 図版7
4「永壽二年正月丙午，廣漢造作尚方明竟，□□□富且昌，宜侯王師命長」	156	双龍	紀年鏡漢10 図版8の1
5「延熹二年五月丙午日天大述，廣漢西蜀造作明竟，幽湅三商，天王日月，位至三公兮，長楽未英，吉且羊」	159		紀年鏡漢11 図版9の1
6「漢西蜀劉氏作竟，延熹三年五月五日戊□竟□日中□□，壽如東王公西王母，常宜子孫長楽未央，士至三公宜侯王」	160		紀年鏡漢12 図版9の2
7「延熹七年正月壬午，吾造作尚方明竟，幽湅三岡，買人大富，師命長」	164	双龍	紀年鏡漢13 図版10
8「延熹囝年五月十五日丙□□□□同竟，其所有者王父母，位至三公宜古市，大吉」	164		紀年鏡漢14 図版8の2
9「延熹九年正月丙午日作竟自有囝，圍龍白虎侍左右，圓者長命宜孫子，□□□□□□吉兮」	166		紀年鏡漢15 図版11の1
10「永康元年正月丙午日作尚方明竟，買者長宜子孫，買者延壽萬年，上有東王父西王母，生如山石大吉」	167	梅鉢	紀年鏡漢16 図版11の2

銘　　文	西暦	鈕	出　典
11「永康元年正月丙午日、幽湅三商、早作尚方明竟、買者大富且昌、長宜子孫、延壽命長、上如東王父西王母、君宜高官、立至公侯、大吉利」	167		紀年鏡漢17 図版12の1
12「永康元年、正月丙日、幽湅黄白、早作明竟、買者大富、延壽命長、上如王父、西王母兮、君宜高位、立至公侯、長生大吉、太師命長」	167		上海54
13「永康元年六月八日庚申、天下大祝、吾造作尚方明竟、合湅黄白、周兮」	167		鄂城33
14「建寧二年正月廿七丙午、三羊作明鏡自有方、白同清明復多光、買者大利家富昌、十男五女為侯王、父嫗相守壽命長、居世間楽来央、宜侯王楽未央」	169		紀年鏡漢18
15「熹平二年正月丙午日、吾作明竟、長楽未央、君宜高官、吉師命長、□□古市□□□□、富貴延年」	173	双龍	鄂城34
16「熹平二年正月丙午、吾造作尚方明竟兮、幽湅三商州刻無極、世得光明、買人大富貴、長宜子孫延年兮」	173		紀年鏡漢20 図版13の1
17「熹平三年正月丙午、吾造作尚方明竟、広漢西蜀合湅白黄、周刻無極世得光明、買人大富長子孫、延年益受長楽未央兮」	174	双龍	紀年鏡漢21 図版14
18「熹平七年正月　五日丙午、暴氏作尚方明竟、幽湅三商、天王日月、上有(不明)富且昌長楽未央」	177		鄂城43
19「光和元年五月作尚方明竟、幽湅白同、買者長宜子孫、延年益寿、長楽未央、宜侯王大吉羊、宜古市」	178	梅鉢	紀年鏡漢22 図版12の2

みたのが第3表である。1、5、11、12、16、18は環状乳神獣鏡、2は夔鳳鏡、その他12面は獣首鏡である。上に挙げたのは、1と2以外は2世紀後半の紀年を持つもので、中でも龍鈕を持つ獣首鏡から判明した第3四半期を中心とした。

こうしてみてみると、獣首鏡は、それ自体あまり多くないことから考えて、このように紀年鏡の存在する確立は非常に高いと言える。この時期の紀年鏡に環状乳神獣鏡や後述する方銘四獣鏡などもあるが、大半は獣首鏡であることがわかる。出土地を見ておくと、1は重慶、2は伝洛陽、5は伝浙江、7は楽浪、12は伝河南、13・15・18は鄂城、19は伝長沙である。

まず、鈕に関してまとめると、龍鈕4例(4・7・15・17)、梅鉢鈕2例(10・19)で、鈕に文様が施されている例が約1/3にも及ぶ。この少し後の中平の年号を持つ方銘四獣鏡も梅鉢鈕であるので、2世紀後半の紀年鏡で、鈕に文様を持つものの割合はかなり高いと言える。

銘文は共通語句が多く、19例の中の多くが複雑に関連し合い文章の補完が成立する。はじめに、1(105年)、4(156年)、5(159年)、17(174年)の4面をとりあげ比較してみる。

1元興元年五月丙午日　天大赦　廣漢　造作尚方明竟　幽湅三商　周得無極　世得光明
4永壽二年正月丙午　廣漢　造作尚方明竟
5延熹二年五月丙午日　天大述　廣漢西蜀造作　明竟　幽湅三商
17熹平三年正月丙午　吾造作尚方明鏡廣漢西蜀　合湅白黄周刻無極　世得光明

1　長楽未英　富且昌宜侯王師命長生如石、位至三公、壽如東王父西王母
4　□□□　富且昌宜侯王師命長
5天王日月　位至三公兮　長楽未英　吉且羊
17買人大富　長　子孫延年益受　長楽未央兮

1と4は、年代的には51年離れるが、1の銘文の省略形が4である。1と17は、69年の開きがあるが、語句の置換、省略及び新語の挿入でこれも大変共通性が高い。

次に、「正月丙午日」を持つ10、11、12(167年)、16(173年)、17(174年)を取り上げる。

10永康元年正月丙午日　作尚方明竟
11永康元年正月丙午日　幽湅三商　早作尚方明竟
12永康元年正月　午日　幽湅黄白　早作　明竟
16熹平二年正月丙午　吾造作尚方明竟　幽湅三商　州刻無極　世得光明
17熹平三年正月丙午　吾造作尚方明鏡　廣漢西蜀合湅白黄　周刻無極　世得光明

10買者　長宜子孫買者延壽萬年　上有東王父西王母　生如山石大吉
11買者大富且長宜子孫　延壽命長　上如東王父西王母　君宜高官、立至公　、大吉利
12買者大富　延壽命長　上如　王父西王母兮君宜高位、立至公　、長生大吉、太師命長
16買人大富貴長宜子孫　延年兮
17買人大富　長　子孫　延年益壽

この5面のうち、11と12については、12は方格内の銘文のため4字づつで収まるように11が省略された形となっている。11、12と16、17の「幽湅三商」、「幽湅黄白」は語順の入れ換え、5面ともに有す「買者大富、長宜子孫、延壽命長」の語句は微妙な違いはあるものの共通句と言える。確かに、永康元年鏡と熹平二、三年鏡は一見すると無関係のように感じられるが、以上のように相互関係は明らかである。このようにして、全ての銘文を検証し、共通する語句に注目し、その中の一部を簡単にまとめると次のようになる。

広漢または広漢西蜀	1、2、4、5、6、17
尚方明竟	1、2、3、4、7、10、11、13、16、17、18、19
買人、買者、買竟	2、7、9、10、11、14、16、17、19
富且昌宜侯王師命長	1、4
合錬白黄(幽練白黄)	2、12、13、17
五［十］男四［五］女爲侯王	2、14
周刻無極世得光明	1、16、17
壽如［上有］東王父西王母	1、6、10、11、12、18

「広漢」「広漢西蜀」の語句が入るものが6面あるが、これは17を除き古例の2世紀初めから半ばすぎまでの約50年のものである。3は、該当部分が判読不能なため確定し得ないが、これも可能性は高いように思われる。「広漢」は『漢書』地理志の記載にあるように漢代に置かれた郡名であるが[2]、ここでは、銘文から広漢郡に尚方が置かれ鏡を作っていたことがわかる。「尚方明竟」や「買」は半数以上の鏡が有し、全期間を通じて用いられている。特に、この時期「買」の字がはいる銘文の集中度は顕著である。「買者延壽萬年、買者長宜子孫」や「買者大富且昌」などの文章は、尚方の性格から考えて、その製品を宣伝しているとするよりも、貨殖に長ぜんがためと考えた方がよいだろう[3]。その他の例も、年代的に数十年の開きはあっても銘文に類似点は多い。

以上のように鈕の文様のみならず、銘文についても上のような語句を中心にして様々なパターンで相互の補完関係が成立する。このことから、2世紀後半に製作された紀年鏡は、銘文の比較検討と鈕文様の同一性から考えて広漢郡の尚方、すなわち今の四川省の官営工房で作られたものが多いようである。鏡は各地の尚方で製作されたが、ことこの時期の紀年鏡に関する限り四川の尚方は中心地であったようである。その後、3世紀に入る頃には、「建安」の年号をもつ重列神獣鏡や「会稽山陰」「会稽所在」の銘を持つ対置式神獣鏡に顕著に見られるように、鏡の製作は揚子江中流域で盛んになったことがわかる。それ以前は、四川の工房で紀年鏡のみならず、双龍旋回式や梅鉢式の鈕を作っていたのである。

獣首鏡の銘文を中心に、環状乳神獣鏡や夔鳳鏡のそれも加えて考察すると以上のようなことが知れるが、龍鈕を持つ鏡には銘文のないものもあるため、夔鳳鏡、環状乳神獣鏡、方銘四獣鏡についても大まかであるが、鏡の製作年代の動向を確認しておく必要がある。

夔鳳鏡からみてみよう。夔鳳鏡の紀年鏡は、元興元年(105)と永嘉元年(145)がある。南京市や長沙市の西晋墓からも出土していることから、2世紀初、後漢後期に出現し、魏晋代になって盛行した鏡のようである。夔鳳鏡の紀年鏡は、2面と少なく銘文も比較対照し得るものではないため龍鈕を持つ夔鳳鏡の考察を深めるのは難しいようである。

環状乳神獣鏡は、後漢の元興元年(105)から西晋の泰始10年(274)までの紀年鏡がある。これから、後漢後期に出現し、西晋代まで造られた鏡であることがわかる。また、南朝墓からも出土しているため長い間流行した鏡と言える。紀年鏡では後漢時代の後期、2世紀後半の紀年鏡が多く、環状乳神獣鏡の紀年鏡の半数近くを占める。この環状乳神獣鏡は大田南鏡もそうであるため、また後で触れることにする。

方銘四獣鏡は、方銘獣文鏡の1種である。紀年鏡は、中平六年(189)鏡と初平元年(190)鏡がある。中平六年鏡の銘文は、「中平六年正月丙午日、吾作明竟幽湅三羊自有己、除去不羊宜孫子、東王父西王母、仙人玉女大神道、長吏買竟位至三公、古人買竟百倍田家、大

吉天日月」であり、鈕は梅鉢式である。初平元年鏡の銘文は、「初平元年正月戊午日、吾作明竟自有紀、除去不羊宜古市、年而、東王父西王母仙人子、右間赤公子、千秋萬年不失志、買者大貴昌」であり、この鏡の鈕も梅鉢式である。この2面の鏡は鈕及び副銘は全く同じであり、銘文もよく似ていることからやはりこれも同一工房で製作された可能性がある。広漢の文字は入らないが、他との比較から同じく広漢郡の尚方で作られたと思われる獸首鏡の永康元年鏡と光和元年鏡も梅鉢鈕であった。このことと、銘文の類似性から考えて、この2面の方銘四獸鏡も同じ広漢の尚方で作られたのかも知れない。このように、方銘四獸鏡の紀年鏡は僅か2面に過ぎないが、鈕と銘文から得られるものは大変興味深いものである。

龍鈕を持つ鏡は、銘文の考察から2世紀後半、四川省の官営工房で作られた可能性が高い。獸首鏡以外の3鏡式の紀年鏡を概観したところでは、夔鳳鏡以外の環状乳神獸鏡と方銘四獸鏡は2世紀後半の製作を補強する資料と言える。大田南鏡は、残念ながら方格内の文字は潰れているものが多く、銘文の面からの考察は難しいが、鏡の属性分析から製作時期は推定できる。龍鈕を持つため、2世紀後半頃に製作されたと考え、この時期の環状乳神獸鏡と大田南鏡を比較してみよう。

2世紀後半の紀年を持つ環状乳神獸鏡は4面見つかっている。延熹2年(159)、永康元年(167)、熹平2年(173)、中平4年(187)である。

延熹二年(159)鏡――外区は、銘帯と渦文帯からなる。銘文は、表3の5である。銘文から、広漢西蜀の尚方で造られたことがわかる。内区は、環状乳6つの三神三獸、半円は12、半円内は無文、方格は12、方格内に1字づつ配される。

永康元年(167)鏡――外区は、銘帯と菱雲文帯からなる。銘文は、表3の11で、同じ永康元年の獸首鏡と極めて近い。内区は、環状乳6つの三神三獸、半円は12、半円内は無文、方格は12、方格内は1字づつ配される。副銘は、「吾作明竟、幽湅三商、君宜矦王」である。

永康元年(167)画文帯鏡――外区は、画文帯と菱雲文帯である。内区は、環状乳8つの四神四獸、半円は12、半円内は無文、方格は12、方格内は4文字づつ配される。銘文は第3表の12である。

熹平二年(173)鏡――外区は、銘帯と菱雲文帯からなる。銘文は、表3の16である。内区は、環状乳6つの三神三獸、半円は12、半円内は無文、方格は12、方格内は1字づつで、副銘は「吾作明竟自有方、白同清明兮」である。

中平四年(187)画文帯鏡――上海55である。外区は、画文帯と菱雲文帯がめぐる。内区は、環状乳8つの四神四獸、半円は13、半円内は無文、方格は13、方格内は4字づつうめ

る。銘文は、「中平四年、五月午日、幽湅白同、早作明竟、買者大富、長宜子孫、延年命長、上如王父、西王母兮、大楽未央、長生大吉、天王日月、太師命長」である。

中平四年(187)画文帯鏡――浙江54で伝紹興県出土という。外区は画文帯と菱雲文帯からなる。内区は、環状乳8つの四神四獣、半円は13、半円内は無文、方格は13、方格内は4字づつうめる。銘文は「中平四年五月(以下報告書に記載なし)」である。この鏡は、上海55と同型の可能性がある。

大田南画文帯鏡――外区は画文帯と渦文帯、内区は、環状乳6つの三神三獣、半円は12、半円内は渦文、方格は12、方格内は4字づつの銘文である。銘文は遺存が悪く、判読不能なものが多い。

2世紀後半の紀年を持つ環状乳神獣鏡からわかることは、この時期が銘帯式のものと画文帯式のものの過渡期であり、また三神三獣式と四神四獣式のものの過渡期でもあるということである。永康元年鏡と中平四年鏡は、画文帯のある古い例で、画文帯の出現とともに内区は四神四獣になっている。このことから考えて、大田南鏡は画文帯式で三神三獣であるため2世紀後半でも古い頃に造られたものと推定できる。

3　その他の鈕文様

鈕の龍文様に注目して類例を探していくと、半肉彫り技法ではなく象嵌により文様を持つ鏡がある。

鍍金画文帯環状乳対置式神獣鏡　　鄂城95

鍍金画文帯対置式神獣鏡　　鄂城96

対置式神獣鏡には紀年鏡が多いが、例えば、建安20年(215)鏡などの存在から3世紀の初め頃には対置式神獣鏡が成立していた。このことからわずか2面の例であるが、龍を表現するにも、2世紀後半には半肉彫りによって、3世紀に入ると象嵌によって表すように変化したことがわかる。龍を表現するにも時期差があるようである。

また、半肉彫りのものでは、浙江省紹興県漓渚出土の環状乳神獣鏡(獣面鈕、浙江56)、静岡県磐田市松林山古墳出土の三角縁神獣鏡(蛙鈕)のような鏡もある。このように、2面だけではあるが、半肉彫りで動物を表現する鏡が、中国で1面、日本でも1面出土している。浙江省出土の環状乳神獣鏡は、画文帯式で、環状乳は8つの四神四獣である。時期的には2世紀後半以後のものであろう。松林山古墳出土鏡は、三角縁神獣鏡であることから、3世紀前半と言われている。龍文様を持つ鏡は、半肉彫りのものは2世紀後半、3世紀に入ると象嵌による表現へと変化した。浙江省出土の獣面を持つ環状乳神獣鏡はこの範疇に収まるが、この松林山出土の三角縁神獣鏡はこの範疇には収まらないことになる。この点

は注意しておく必要がある。

また、これ以外にも半肉彫りの文様をもつもので、北朝鮮平壌市大同江区域出土の夔鳳鏡(楽浪郡下1284)がある。これは、渦文や円文が組みあわさって配置されたものであるが、この鏡に関しては、単にこのような文様のみを考えるのではなく、双龍旋回式の図像とあわせて考えるべきであろう。それは、文様の配置が例えば円文の位置する部位は双龍旋回式の龍の鰭の巻きあがった部位に相当するなど関連性がうかがえるからである。そうした点からこの夔鳳鏡の鈕文様については、双龍が旋回する図像が本義を失い、簡略化されこのような文様へ変化したものと考えたい。

4　小　　結

大田南2号墳で発見された環状乳神獣鏡は、『鄂城』の2面の鏡とともに、これまで図版等を中心とする遊離資料であった龍鈕を持つ鏡を、初めて考古学的遺物として再評価し得るようにしたことでも大変意義あるものである。

龍鈕を持つ鏡13面の内、紀年のあるものが4面あった。これを基準に鈕と銘文の検討を通じて、2世紀の第3四半期の紀年鏡は、後漢代、広漢郡に置かれていた尚方で製作されたものが多いことが判明した。鈕の文様はこの時期、龍鈕と梅鉢鈕に代表されるが、鈕に文様のある鏡も同じ尚方で作られたものの特徴と言える。

「広漢西蜀」の地は、楽浪漢墓の出土遺物において顕著なように、前漢代から漆器生産も極めて活発な土地であった[4]。本稿でとり上げた鏡の中では、東京国立博物館蔵の夔鳳鏡と獣首鏡が楽浪出土という伝を持つ。この2面の鏡は「広漢西蜀」で作られた他の漆器などとともに遠く楽浪の地まで運ばれたのかも知れない。そして、彼の地で作られた鏡は、楽浪までだけでなく、倭の地までもたらされたようである。

〔謝辞〕本稿をなすにあたって、常日頃から示唆ある御助言を頂いている九州大学の岡村秀典氏には該当資料も含めて、多くの点で御教示いただきました。また、資料の調査の際には、以下の諸先生、諸氏・諸機関の御世話になりました。記して謝意を表します。

秋山進午　早乙女雅博　高橋美久二　高浜秀　竹内順一　谷豊信　難波田徹　橋本清一

望月幹雄　東京国立博物館　五島美術館　山城郷土資料館

本稿提出後、当センター副理事長樋口隆康先生に、双龍図像には二種類あるとの御教示をいただいたが、本稿に活かしきれなかった。また紀年鏡に関しては、筆者の不明から『中原文物』1982年1期に発表された元興元年獣首鏡、建康元年獣首鏡や『湖南考古輯刊』4に発表された永壽三年獣首鏡などが脱漏している。2世紀の紀年鏡の問題については、別稿を用意しているので、次の機会に詳述したい。

（うしま・みつひさ＝当センター）

1　肥後弘幸「大田南2号墳の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第38号　1990(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)

2　『漢書』巻二十八上　地理志第八上に、「廣漢郡、戸十六萬七千四百九十九、口六十六萬二千二百四十九。縣十三、梓潼、汁方、涪、雒、緜竹、廣漢(以下略)」とある。

3　尚方は、『漢書』巻十九上　百官公卿表第七上の顔師古の注に「尚方主作禁器物」、『後漢書』志第二十六　百官三の少府の条には「尚方令一人、六百石。本注曰、掌上手工作御刀剣諸好器物。丞一人。」とあるように、皇帝御料の諸器物を製作したところである。漢代の尚方に関しては、米沢嘉圃「漢代に於ける宮廷作画機構の発達」(『国華』571、574～577　昭和13年)に詳しい。

4　梅原末治『支那漢代紀年銘漆器図説』(京都　1984年)

書物の略号は次のとおりである。

巌窟　　梁上椿著　田中琢、岡村秀典訳『巌窟蔵鏡』(京都　1989年)
樋口古鏡　樋口隆康『古鏡』(東京　1979年)
小校　　劉体智『小校経閣金文』巻十五、十六、十七(1935年)
紀年鏡　梅原末治『漢三国六朝紀年鏡図説』(京都　1984年)
鄂城　湖北省博物館、鄂州市博物館編『鄂城漢三国六朝銅鏡』(北京　1986年)
精華　梅原末治『欧米蒐儲支那古銅精華』鏡鑑部1(京都　1933年)
支那　富岡謙蔵『支那古鏡図説』(京都　1921年)
上海　陳佩芬編『上海博物館蔵青銅鏡』(上海　1987年)
浙江　王士倫編『浙江出土銅鏡』(北京　1987年)
楽浪郡　朝鮮総督府『楽浪郡時代ノ遺蹟』古蹟調査特別報告　第四冊　(1927年)